

# 幼児の砂遊びに関する日本の研究動向と今後の展望

朴 恩美・中坪 史典

(2008年10月2日受理)

## A Review of Studies on Japanese in Children's Sand Play

Eunmi Park and Huminori Nakatsubo

**Abstract:** The purpose of this study is to review of Japanese related literature about the play with sand of young children and is to examine some issues that remain to be explored in this field. First, we collected 57 documents (papers or literatures) about the play with sand of young children and classified them in nine categories. Secondly, about nine classified categories, we surveyed each results of research. Finally we discussed some issues about a future research in terms of the play with sand. As a result, three points of the next were clarified. (1) It is necessary to study individual differences and the relationships between young children. (2) It is necessary to study the support of the early childhood educators. (3) It is necessary to compare with foreign results of this research.

Key words: children, infant, sand, sand play

キーワード：子ども、幼児、砂、砂遊び

## 1. はじめに

幼稚園や保育園では、夢中で砂遊びをする幼児の姿がよく見られる。砂や土を用いてケーキやプリンをつくったり、砂場に水を運びこんで、川やダムの建設や工事を始めたりする光景を目にすることができる。砂場は、年齢の低い幼児でも集中して遊ぶことができる、年齢が上がるにつれて、仲間と協力しあいながら遊びを展開する(箕輪 2007, 2008)、水を用いることで砂の壁を崩すことから、解放感やカタルシスを得ることができる(粕谷 2007)など、様々な意義が指摘されている。また、松本(1993)は、幼児が砂遊びに魅きつけられる理由について、「2歳児から5歳児までまんべんなく、ほとんどの子どもが遊ぶことができるし、遊びにおいては大きさや形が問題にならない。これができたからおしまいということもなく、どこまでも発展の可能性に満ちている」と述べている。このように砂遊びは、幼児にとって多方面から楽しむことのできる遊びの一つであると言える。

それでは一体、幼児の砂遊びに関する研究は、これ

までどのような成果が蓄積されているのだろうか。この点を検討することは、幼児の砂遊びに対する理解を深め、改めて捉え直すことができるように思われる。例えば、園生活の中で多様な援助を通して幼児と関わっている保育者にとっては、ともすると「砂場で遊んでいるから、それほど危険ではないし、別に大きな問題を起こさずに元気に遊んでくれるだろう」などと安心してしまい、砂遊びの意義やそれに含まれる学びの要素を見過ごしてしまうこともあるかもしれない。先行研究を検討することは、保育にとって実は大切なことであるにもかかわらず、日々の生活の中にいると気付かなくなったり、見過ごしがちになっている点について、再認識することを促すのではないだろうか。

そこで本研究では、幼児の砂遊びに関する日本の研究動向を対象に、その成果をレビューするとともに、今後の課題を見出すことを目的とする。ところで、笠間(2007)は、砂場の歴史的視点に基づいて、砂遊びの研究動向と課題について論じている。本研究では、この成果を踏まえながらも、先行研究をタイプ別に分類

し、分析することで、幼児の砂遊びに関する研究の成果を検討する。本研究の成果をもとに、今後は、幼児の砂遊びに関する海外研究との比較検討を可能にすることが考えられる。

## 2. 研究方法

先行研究は、以下の手順で収集した。第一に、国立情報学研究所（NII: National institute of informatics）が運営する学術文献データベース“NII 論文情報ナビゲータ（CiNii: Citation Information by NII）”を用いて、「子ども」「幼児」「砂」「砂遊び」のキーワードをもとに、1980年以降を対象に論文検索を行った。その結果、学会誌、研究紀要、学会発表抄録、雑誌等において、57本の文献があることがわかった。

第二に、ヒットした57本の文献をすべて入手するとともに、それぞれの文献の内容を把握するために、要旨を記した文献カードを作成した。これによって文献ごとにポイントを整理したり、幾つかのカテゴリーに分類したりなど、先行研究の分析に関する作業が容易になると考えた。

第三に、上記の作業をもとに、それぞれの文献の内容を精査したところ、次の9つのカテゴリーに区分することができた。(1) 砂場、砂遊びの歴史について検討したもの、(2) 幼児にとっての砂遊びの意味について検討したもの、(3) 砂遊びを対象に、幼児の年齢や発達について検討したもの、(4) 幼児は砂場でどのように遊びを構成するのかについて検討したもの、(5) 保育者のかかわりについて検討したもの、(6) 環境構成としての砂遊びの役割について検討したもの、(7) 砂場における道具の使用法について検討したもの、(8) 砂遊びの教育的意義について検討したもの、(9) 砂遊びに関する研究の課題を整理し、検討したものである。

第四に、それぞれの文献の記述者の立場について、それらが研究者の研究なのか、それとも保育者の研究なのかという視点から区分した。

第五に、それぞれの文献の研究方法について、それらが観察調査なのか、文献調査なのか、アンケート調査なのか、その他なのかという視点から区分した。以上の分類を表1に示す。

表1をみると、9つのカテゴリーに区分されたものの中で、幼児にとって砂遊びの意味は何なのかについて検討したものが最も多く、次に砂遊びにおける遊びの構造や展開に関連付け、砂場でどのように遊ぶのかに関するものが多いことがわかる。一方、幼児に好かれている砂遊びからどのような教育的意義が捉えられるのか、また、様々なやり方で幼児の隣で彼らの遊び

表1 記述者と研究方法による分類（重複あり）

ネーミング	記述者の立場		研究方法			
	研究者	保育者	観察調査	文献調査	アンケート調査	その他
1) 砂場や砂遊びの歴史的検討	6			6		
2) 幼児にとっての砂遊びの意味	19	1	15	4	1	1
3) 幼児の年齢による発達の検討	7		5	1	1	
4) 幼児は砂場でどう遊ぶのか	10	1	10	1		
5) 保育者のかかわり	5		4		1	
6) 環境構成としての砂遊びの役割	11	1	6	3	3	
7) 砂場における道具使用法	1		1			
8) 砂遊びの教育的意義	2		1	1		
9) 研究課題の整理と検討	1			1		

の成長を見守る保育者からのかかわりや援助についての研究は少ないことがわかる。これらについては、今後、さらなる検討が行う必要があると考えられる。そして、研究の記述者が研究者であるのか、子どもとともに生活をする保育者であるのかについて分類したところ、保育者によるものもあるが、ほとんどが研究者によるものであった。

研究方法についてみると、他の調査方法より主に観察調査を用いたものが多い。それは、幼児がどのように遊びを展開していくのか遊びの全体の内容をみながら、砂遊びを通して幼児が何を感じるのかなどについてより質的なアプローチでその意味を探るという意図があったと考えられる。

## 3. 先行研究の検討

既述した9つのカテゴリーを対象に、以下では、それぞれの研究動向について概観する。

### (1) 砂場や砂遊びの歴史的検討

子どもたちが幼稚園や保育園で砂遊びができるようになるのは、砂場という特有の環境的な配慮と関係があるからに他ならない。この点を考慮するとき、幼稚園や保育園への砂場の普及を辿ってみると、砂遊びの歴史を見ることができる。こうした砂場や砂遊びの歴史に関する研究の成果は、笠間によって明らかにされている。笠間（1993, 1998）によれば、幼児教育施設における「砂場」の普及は、明治30年代半ば以降に本格化し、およそ大正10年頃までに幼児のための当然の遊び場として位置づけられるようになったという。そうした中、明治時代の半ば以降から、子どもの自発的な活動や経験の重要性が強調されるようになり、幼児の姿に学んだ実践家などが硬直した保育を破り、幼児の興味を大切にす保育を模索することで、今日の「砂場」が普及したと記している。また、日本の「砂場」

のルーツは、アメリカ合衆国にあり(笠間, 1999a), そのアメリカ合衆国の「砂場」の起源は、ドイツにあること、従って日本の「砂場」の真の起源も、ドイツであることを指摘している(笠間, 1999b)。

## (2) 幼児にとっての砂遊びの意味

それでは一体、上記の背景から誕生した砂場について、そこで幼児たちが行う砂遊びには、どのような意味があるのだろうか？

大野(2003)は、昔と今を比較し、幼児の外遊びに対する熱意の喪失を指摘するとともに、誰もが経験したことある砂遊びの意味について検討した。その結果、砂遊びは、幼児の働きかけによってたくさんの遊びがあり、山作り、穴作りなどから、創造の世界をつくることができると述べている。また、一人の幼児を対象に観察を実施した石井(1994)は、最初は砂の感触を感じていたのが、次第に道具が必要になっていき、砂とのかかわりが始まると述べながら、じっくりとした身体を通しての遊びが幼児の中に育っていることを指摘する。他方、仲間同士の砂遊びの様子について検討している福西(2005)は、遊びにおいて、崩れ落ちる砂の動きを表現するように「シャラ、シャラ、シャー」という擬態的な言葉を伴うことで、砂という物質のイメージをもたらし、仲間と共有する行動の世界へと向かう契機となったことを明らかにした。さらに、笠間(2007)は、幼児は砂をすくったり、いれたりという行為から、砂が入ったカップを地面などにひっくり返す行為は、何らかの形を意識的につくるという「表現」に変わっていく姿がみられたと述べている。以上の点から、幼児にとって砂遊びとは、彼(女)たちの内面のイメージや、想像の世界を外へ表出することができると言えよう。

## (3) 幼児の年齢による発達の検討

既述した幼児にとっての砂遊びの意味を踏まえた上で、そうした砂遊びが幼児の年齢とともにどのように発達の的に変化していくのかを明らかにした研究がある。箕輪(2007)は、砂遊びの展開や幼児同士の相互作用について、年齢による差異を検討している。3歳児の場合、他の幼児あるいは自分が起こした砂の変化や、偶然起きた砂の変化を、身体感覚を通して十分に経験していること、4歳児の場合、自発的に道具を選択しながら、山作りに必要な基本的な行為をバランスよく行っていること、5歳児の場合、幼児同士で1つの対象を安定して共有し、変化する砂の様子を見ながら、遊びを展開していると言う。また、穴掘り遊びにおいては、年齢とともに複数の穴掘りができるようになること、掘る場所の分担ができるようになることなどを明らかにしている(箕輪, 2008)。また、半田(1998)

は、3歳児の場合、単独での遊びが多く、4歳児や5歳児になると、幼児同士で協力しあう様子が見られることを明らかにしている。

一方、幼児の年齢に伴う発達の観点で検討をする場合、同じ年齢の幼児であっても、遊ぶ幼児によって遊びのやりとりや形は異なると考えられる。従って、一人一人に焦点をおいた、幼児の個人差についても検討をする必要があると考えられる。

## (4) 幼児は砂場でどう遊ぶのか

砂場において幼児は、どのように遊びを構成し、展開するのだろうか。無藤(1996)は、幼児の遊びのテーマは、遊びに対する動きの流れに応じて現われてくることを指摘するとともに、砂遊びの成立過程について検討している。その結果、遊びのテーマは始めに明確に決められるとともに、遊びが進行するのではなく、まず動きが先行することが多いこと、動きの詳細までの了解が互いになされて遊びが進むのではなく、主な動きの何を受け持つのか、互いの考えをその都度相互了解されなくても、遊びが成立することを指摘する。このことは、遊びを行う際に、次に何をすればいいのか、どのようにすればいいのかに対して、幼児同士が互いに確認しなくても、暗黙的に承認されていることを意味する。

しかし、幼児同士の人間関係の観点からみると、砂場で日々砂遊びをする他の幼児が園生活において仲の良い関係であれば、遊びのテーマに対する意見交換や協力が互いにできることも考えられる。そのため、一緒に遊んでいる相手によって、その遊びの成立や構造、また次の遊びへ展開の変化も異なっていく可能性も含まれることから、その点についても検討を行う余地があると考えられる。

## (5) 保育者のかかわり

砂遊びに夢中になる幼児に対して、保育者はどのようにかかわっているのだろうか。また、どのような援助が必要なのだろうか。この点について、西多(2005)は、水とともに砂に触れている幼児の遊びの中に、教師と一緒に楽しむことで、多くの幼児が池や川に入ることができることを指摘する。これは必ずしも砂遊びに限ったことではないけれども、幼児の遊びが充実するために保育者は、幼児と一緒に驚いたり、不思議がったり、笑ったり、楽しんだりすることが大切であることを裏付けていると言えよう。文部科学省(2008)が指摘した保育者の役割によれば、幼児は、自分の思いを言葉で表現するだけでなく、全身で表現することから、そうした幼児の動きに合わせて同じように動いたり、幼児と同じ目線に立ってものを見つめたり、共に同じものに向かってみたりすることで、幼

児の心の動きや行動が理解できる。このことで幼児の活動が活性化し、保育者と一緒にできる楽しさから、さらに活動への集中力を生むことへと繋がるという。また、柏（2007）は、砂遊びの状況に応じて保育者が助言を行うことにより、幼児は自分で考え、何らかの行動を起こすようになることを明らかにする。これらは、幼児が幼稚園や保育園において、安定感を感じる保育者からのかかわりを通して遊びへの機会を見出しており、また、幼児が自分の意見や遊びの世界を広げることに対して、保育者の役割が重要であることを示す結果といえるだろう。

#### (6) 環境構成としての砂遊びの役割

笠間（1998）は、自然の中の遊びが減少している今日、環境構成としての砂場の役割について、砂を用いてダムづくりや川づくりを行うことは、幼児の創造力・想像力の拡大に寄与することを指摘する。一方、幼児に対する望ましい環境づくりという観点から、自然環境における砂場の意味について検討した研究がある。例えば、塩見・立石（2002）は、遊びの道具の配置や動線について検討した。その結果、幼稚園や保育園での砂遊びにおいては、砂場の周囲に雑草などの自然物を用意するなど、幼児の砂遊びに対する配慮を行っていることを明らかにした。しかし、砂場は、3歳から5歳のいずれも、よく使用する人気のある遊具であるが、ほとんどが1個の砂場設置のため、狭いことと、砂が固く管理上の問題にさらなる検討をすべきであることを指摘している。このことから、大人が幼児の遊び環境をつくっておくというのは、言うまでもないことであるが、その場で幼児たちが何を望んでいるのかを考慮し、それに合わせて幼児にとって、よりよい保育の環境を作るべきであることが求められる。

#### (7) 砂場における道具の使用方法

島田（2002）は、可塑性に富む素材としての砂とかわかって遊ぶ際に、幼児がどのような道具を用いて遊びを展開していくのかについて検討している。その結果、幼児の年齢が上がるにつれ、使用する道具の種類が減少すること、2歳児・3歳児・5歳児の順に、年齢が低いほど、遊び時間に対する使用道具の数が多いことを指摘する。幼児は、身体の発達とともに遊びにおけるアクションも多様になり、それに合わせて遊びへの道具の使用も違ってくることが考えられる。そのため、保育活動との関連性からみると、幼児が砂場でどのような道具を使い、遊びを広げていくのか検討することで、保育者が幼児の遊びに対する適切な援助も可能になると考えられる。

#### (8) 砂遊びの教育的意義

幼児が好む砂遊びについて、教育的観点に焦点をお

いた研究も報告されている。森脇（1993）は、砂遊びの教育的意義について、解放感を味わい、自由に表現することができる、協力する態度を養うことができる、などの点を指摘する。また、田村・本田（2001）は、砂遊びを通して、幼児同士のやりとりや自己表現することで、役割を分担したり、計画的に掘ったりして、知的な発達とともに思考力の芽生えや、社会性の芽生えを培っていると述べている。これは、幼児が思いきり砂にかかわって遊びをするという表面的な活動だけを捉えるのではなく、砂遊びを通じて幼児が何をみつけ、何を学んでいくのかを示すものと言えよう。

#### (9) 研究課題の整理と検討

笠間（2007）は、砂遊びに関する先行研究をもとに、対象となる幼児の年齢について検討している。その結果、多くの研究が3歳以降の幼児期に集中しており、3歳未満児など、乳児期を対象とした研究については、必ずしも十分に扱われてこなかったことを指摘している。このことは、多様な年齢の乳幼児を対象に、研究することの重要性を指摘するものであると思われる。とは言え、乳児の砂遊びについては、安全面や衛生面に関する問題も伴うことが考えられるなど、多くの困難があることも想像に難くない。

## 4. 幼児の砂遊びに関する研究の課題と展望

本研究では、日本における幼児の砂遊びに関する研究動向について検討した。以下、幼児の砂遊びに関する研究の今後の課題について述べる。

第一に、先述したように、田村ら（2001）は、幼児が仲間との砂遊びで社会性の芽生えを培っていると述べた。しかし、遊びを共にしている仲間に対する検討をする必要があると考えられる。それは、相手が誰かによって、幼児同士のやりとりも違ってくだろうし、また、遊びの構造や遊びのテーマへの展開にも影響していると考えられるためである。よって、幼児の社会性に関連付けて、幼児の仲間関係から生じる砂遊びのよさをさらに検討する必要があるだろう。

第二に、幼児の遊びへのイメージに焦点をおいて、上記の中で紹介した福西（2005）の研究のような検討は意味があると考えられる。砂を「シャラ、シャラ、シャー」という特有の擬態的なことばで表現しながら、遊びを楽しむということであった。また、半田（1998）も幼児が砂を集め、「サラサラこな」、「白砂糖」のようなことば表現で遊びを広げていると報告している。これは、幼児が自ら何かをことばで表して、遊びの世界に入ることであろう。このことこそ、幼児の砂遊び



ならではの特徴ともいえるのではないだろうか。よって、今後、砂遊びにおいて、幼児の仲間同士で行われることばの表現にも注目をすれば、興味深い考察になるだろう。

第三に、幼児の遊びにおいては、園生活をともにしている保育者からの援助やかかわりは欠かせないことであるといえる。幼児の遊びのすべての場面で保育者のかかわりが必要であるとは言い難いが、保育者の直接的・間接的援助やかかわりが幼児の遊びに影響をしていることは否定できない。渡邊(2001)と梅田(2003)の研究では、幼児の遊びにおいて保育者のことばかけやかかわりによって、遊びへのイメージ表現ができるようになり、考えを話し合うことになったと論じている。しかしながら、表1をみればわかるように、幼児にとって最も安定し、遊びができる相手である保育者からのかかわりに関して示す情報はまだ少ない状況にある。よって、幼児の砂遊びに関して保育者がどのような考えを持っているのか、また、どのような意図を持ち、直接的・間接的なやりかたで幼児たちに接しているのかについて調べることは意味があると思われる。

最後に、幼児の砂遊びに関する今後の課題として、日本以外の海外のほうに目を向けることが挙げられる。本研究では日本の砂遊びについて述べてきたが、そもそも砂遊びというのは、日本の幼児だけに好かれている遊びの1つだろうか、少し疑問がある。笠間(1999a, 1999b)の研究から明らかとなった砂場の歴史からみると、アメリカやドイツにおいても、幼児たちが砂遊びをすることが予測できる。また、自然とともに遊べることがどんどん減少している中で、様々な国においても幼児の砂遊びが行われているのではないかと思われる。したがって、今後、海外の幼児の砂遊びの現象について検討を行うとともに、日本との比較検討をすることで、さらなる多様な考察ができれば意味のあることになるだろう。

## 【謝 辞】

本論文の執筆にあたり、終始懇切丁寧なる御指導と御助言を賜りました広島大学大学院教育学研究科教授七木田 敦先生と准教授 杉村伸一郎先生に心から深く感謝申し上げます。また、いつも筆者を励まし、暖かい御助言を頂きました、鹿児島女子短期大学講師小津草太郎先生に深く感謝申し上げます。

## 【引用文献】

- 石井光恵. (1994). 子どもが砂場で遊ぶとき—幼稚園での砂場遊びの観察から—*武蔵野女子大学紀要*. 29(2) 219-227頁
- 半田考司. (1998). 幼稚園の砂遊び場に関する考察. *常葉学園短期大学紀要*, 29, 43-50頁
- 福西憲太郎. (2005). 幼稚園における遊びの再考—「砂遊び」の解釈学的アプローチ(3)—. *京都文教短期大学研究紀要*, 44, 60-69頁
- 笠間浩幸. (1993). 屋外遊具施設の発展と保育思想—砂場の歴史を中心に(1)—*北海道教育大学紀要(教育科学編)*, 43, 第2号, 1993, 91-105頁
- 笠間浩幸. (1998). 屋外遊具施設の発展と保育思想(2)—明治期の保育思潮と〈砂場〉—. *北海道教育大学紀要(教育学科編)*, 49, 第1号, 1998, 91-103頁
- 笠間浩幸. (1999a). 屋外遊具施設の発展と保育思想(3)—アメリカにおける砂場の歴史—*北海道教育大学紀要(教育学科編)*, 49, 第2号, 1999, 91-103頁
- 笠間浩幸. (1999b). 屋外遊具施設の発展と保育思想(4)—ドイツに探る砂場の起源—*北海道教育大学紀要(教育学科編)* 50, 第1号, 1999, 61-76頁
- 笠間浩幸. (2007a). 乳幼児期の砂遊び(特集砂遊びと子どもの発達). 発達28(110). 60-67. ミネルヴァ書房.
- 笠間浩幸. (2007b). 乳幼児の砂遊びに関する研究(1) 研究課題の整理と見通し. *総合文化研究所紀要*(24). 162-175頁
- 柏まり・田中享胤. (2007). 子どもの創造的遊びを支える教師の役割—砂場における教師と子どもの対話の分析を通して—*幼・小児童教育研究*, 第19号, 11-21頁
- 粕谷直正. (2007). 砂にかかわる幼児の遊びの構造その理解. *保育学研究*, 第45巻第1号, 34-41頁
- 松本信吾. (1993). 子どもはなぜ砂遊びに魅きつけられるのか. 発達, 53, 48-57頁
- 箕輪潤子. (2007). 砂場における山作り遊びの発達の検討. *保育学研究*. 第45巻第1号, 42-53頁
- 箕輪潤子. (2008). 幼児の穴掘り遊びの発達の検討. *川村学園女子大学研究紀要*. 19, 39-54頁
- 文部科学省. (2008). 幼稚園教育要領解説 文部科学省 <<http://www.mext.go.jp>> (2008年9月30日)
- 森脇健夫. (1993). 生活科の授業研究(1)—砂(土)遊びの授業—. *三重大学教育学部研究紀要(教育科学)*. 44, 117-131頁
- 無藤 隆. (1996). 幼児同士の遊びの成立過程—砂場遊びの分析—*子ども社会研究*, 2号, 3-17頁
- 西多由貴江. (2005). 事例研究: 砂や水に触れて (3

- 歳児). *金沢大学研究紀要*, 51, 6-19頁
- 大野友美子. (2003). 子どもと遊び—子どもの育ちと砂場の役割. *立正社会福祉研究*, 第4巻2号29-42頁
- 塩見優子, 立石あつ子. (2002). 幼稚園・保育園における遊び, 遊具の配置, 動線に関する研究—砂場, ブランコを中心として—*保育学研究*, 第40巻第2号, 81-89頁
- 鳥田素. (2002). 幼児の砂遊びに関する研究: 道具・使用法に焦点を置いて. *上越教育大学幼児教育研究*, 16, 14-17頁
- 田村教子, 本田譲. (2001). 幼稚園における砂遊びの教育的意義に関する研究. *日本保育学会大会論文集抄録* (54), 692-693頁
- 梅田優子. (2003). 子どもの遊び世界への保育者の援助についての考察—「指向性」をもつ存在としての保育者と子どもからのかかわり. *保育学研究*, 第41巻1号, 63-70頁
- 渡邊ユカリ. (2001). 幼児の人間関係を育むための保育者の役割. *秋草学園短期大学紀要*, 18, 42-53頁